

日本古典文學大系 24

今昔物語集 三

山田俊雄
山田英雄
山田忠雄
山田孝雄

校注

岩波書店刊行

昭和 36 年 3 月 6 日 第 1 刷 発行 ©

定価 650 円

校 注 者

やま だ よし お やま だ ただ お
山 田 孝 雄 山 田 忠 雄
やま だ ひで お やま だ たし お
山 田 英 雄 山 田 俊 雄



発 行 者

東京 都 千代田区 神田一ツ橋 2ノ3

岩 波 雄 二 郎

印 刷 者

長 野 市 中 御 所 2 ノ 3 0

田 中 忠

発 行 所

東京都千代田区 株式
神田一ツ橋2ノ3 会社

岩 波 書 店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

解 說	二
凡 例	四七
卷第十一 本朝 付仏法	四九
卷第十二 本朝 付仏法	一三七
卷第十三 本朝 付仏法	二〇三
卷第十四 本朝 付仏法	二七一
卷第十五 本朝 付仏法	三四五
卷第十六 本朝 付仏法	四一九
卷第十七 本朝 付仏法	五〇一

解 説

本朝部の初に

本集の編者が各説話を、一回の法会・唱導における例話としての効果的利用をねらって纏めたことは、その説話の長さが驚くべき程平均されていることでも窺えるが（↓解説二〇頁）、これらの説話は凡そ二つの一貫した編輯方針により統一を受けている。即ち、第一は、これによって三国に亘る生きた仏教史の概説を試みんとしたテーマ上の問題であり、第二は話の筋もしくは素材乃至は出典・典拠等、種類の観点から凡そ似通うと考えられるものを、二篇もしくは三篇を単位にして連鎖せしめたことである。而して、各巻共通に、また、各冊（暫く本大系の分冊に従って考えることとする）同様に、冒頭に近い部分は、教理敷衍に忠実にして謹直・単調・生硬の風を持ち、末尾に近い部分は、或は口碑伝承に取材したかと思われる興味深い説話を纏め掲げ、時に挿話に逸脱するなど、その対照は誠に鮮かであり、本集の編纂が合目的に進められたことを最も力強く実証するものと考えられる。

しかも、右の見解は、巻八中扉裏において述べた如く、三宝感応要略録を粉本とする対応関係でも大きな支援を受ける。そのような意味で、本冊は、天竺部・震旦部がそうである如くに一つの大きなブロックをなし、三冊併せて本集の中核的位置を占めるものと目される。即ち、編輯の手続・構成の方法からいえば、本冊は天竺部・震旦部と共に、恐らく正篇ともいふべき地位を占めるものといっても過言ではあるまい。勿論、本朝付仏法は、本冊で終るものではなく、諸本共通の欠巻である巻十八を含め、巻十九・二十と続くのであるが、現存のこの二巻は既に三宝感応要略録の包蔵する内容の域外に出るといふ観点からするならば、猶、続篇もしくは拾遺的な性格を持つていることは明かである。換言するならば、本集の編纂は、本冊を以て一往の目的を達したものであるといふべく、爾後の諸巻は、大局的に見れば、その書き継ぎではないか、という疑いが極めて強い。勿論、それは、正篇に対して続篇、内篇に対して外篇に別種の編纂者を

予想するということの意味するものではない。本集の如き大部の書、しかも計画的な編纂を持つ書においては、当然、編纂途上に種類の意味の息継ぎが予想される訣であり、本冊がその息継ぎの中では最も大きなものの一つではないか、ということを考えてみたまでである。

素材・舞台が海の彼方、遠い昔から、同じ日本の比較的近い時代、身近な場所へと移るにつれて、編者の筆は次第に暢達を加え、人間の顔（↓月報）、鬼の姿（↓解説一一頁）を描いても、女狐にばかされる男を写しても（↓卷十六〔七〕）、生き生きしさと具象性とを帯びるようになり、また、主として京都を中心としたもののみではあるが季節感が籠められるようになり（↓解説一二頁）、漸く現代人の理会の範囲内に近づいてきた観がせられる。勿論、その近づき方と遠ざかり方とは、典拠とされた日本漢文自体に備わる文芸性と、訳出態度を含む説話そのものへの編者の志向とによって規定されることではあるが、概していえば、その類話に見られる画一性にして天竺部・震旦部に勝るとも劣らぬものがある事実は、編者の説法的意志の不拔にして倦むことなきを思わしめて余りあるものといえよう。しかしながら、かるが故に本冊を以て興味索然たりとする如きは儼に戒むべきであり、叙上の事情を以てするならば、正に盾の一面しか見ぬものという評を甘受せねばならぬ。訓読性の多寡・表記法の確立と逸脱と、用語・語法の種種相からするならば、本冊は、その固さにおいて震旦部よりは稍弱く、天竺部に幾分なりとも復帰の趣きを持つことは否めない。

卷十九・二十の二卷こそは、本朝付世俗への過渡の巻といえようが、その二卷の基盤をなすものは実に本冊である。いわば正篇の末冊であると共に、種種、流動の相が見られることはまことに興味深いことであり、特に読者にとって注意せらるべきことであろう。

各巻の組織と説話の排列

卷十一 a 一より一二までは仏法・伝来史話であること、震旦部の冒頭（卷六〔一〕）と性質を同じくするものと見られるが、これらの諸話は、同時に、我が国で聖人といわれる人達の略伝乃至行状記をも兼ねている意味では、天竺部の起首における釈迦の伝記的諸話と軌を一にする。就中、一は、聖徳太子が前生地に嘗ての持経を取りに己が魂を遣し、二は

文殊の化身といわれる行基が己が前生との対比において釈智光の前身を露わす意味において卷五の仏の前生譚との近似を思わせる。三は代表的行者の架橋と讒による遠流とで二と繋がり、四は登場人物の共通と唐僧の嫉視とで二と連絡を保つ。五は相手僧を論破する廉で四と、六は広嗣の直諫で五と一脈相通う。七は海辺に婆羅門僧正を迎える点と、諸人の凡愚とで六の海辺における広嗣の討死・帝王の暗愚と二重の係わりを持つ。七・八は、高僧の来朝およびその友情という二点で深い結びつきを持つ。九以下は、求法入唐の高僧で排列が行なわれているが、一〇の紫衣と一一の纈纈とは無関係では有るまじく、一二の石窟は直接に一三の奇巖に連なるものである。

b 一三以下は、一言でいえば、諸寺の縁起譚であるが、一面において仏像の靈驗譚を加味する点、卷六の一一・三〇の諸語と相通じ、起塔縁起譚をも含む意味では卷十二の冒頭と聯繫を保つものと考えられる。一五・一六は化人の造った本尊で、一六・一七は数代に亘る天皇の造寺、及び摸作、二二・二三は怪木という点で共通する。二四は建材運搬で前二話と、女の露なる膚を見て落墮した点で二五・二六の女人禁制と連絡し、二七の洞は二八以下の山中建寺と綜合される。二八・二九・三〇は本尊の弥勒で、二八・二九は靈異の老僧で、二九・三〇は天智天皇でそれぞれ鎖り合う。三一・三二は地名の長谷と本尊の十一面觀音で相隣り、三五・三六は毘沙門で続けられる。三五は毘沙門即觀音という発想で前群と結びつくものであらう〔本巻の典拠には三宝絵詞の外に、今日は佚した各寺の縁起が用いられたものと覚しい〕。

卷十二 a 一・二は造塔靈驗譚。b 三より一〇に至る八話は、本邦における著名な法会の縁起譚。三は法明尼の故に二の女主人公乃至その娘と繋がり、以下四・五・六の女帝に関する一群の話を起す縁となる。

c 一一より二三に至る諸仏の靈驗譚の中で、一一は橋を渡る縁で一〇の八幡大菩薩の渡御と一脈のつながりを持つ。一二・一二・一三は遺棄された仏像が物を言って助けられる点で統一せられ、一七の物言う仏と呼応する。

一四・一五・一六は、それぞれ、急難・貧窮・王難にあった時、心を至して念仏すれば利益・福の有るべきを説く点で一致する。一四は二人の下僕の仕える主人の不信を以て纔かに前話の主人公の毀仏と結びつき、一五・一六は大安寺で統一される外に、主人公が貧女・尼なる故に、纏て一七・一八・一九の一聯の女主人公の諸話を導き出す。

一七は盗まれた、一八は猛火中の絵像がそれぞれ事無きを得た点で相通じ、一八・一九は寡婦で統一される。

二〇・二一は薬師寺・山階寺の再建に関する、二二・二三は法成寺に関する靈驗譚。二〇は薬師の縁で一九と聯繫し、二二・二三は道長の登場と、靈異を諸人が見たか、少数の人が見たか等の点で更に二重のかかわりを持ち、やがて同じく道長にも関係ある二四の関寺の牛仏の話を導入する。

d 二四・四〇は、大概、法華經の靈驗譚であり、卷十三の諸話および卷十四前半と大きく統一される。

二五は牛の話で二四と続き、亡母の追善で二六の父母の報恩写經の話と相隣る。

二七は經筥を以て二六と相連なり、肉食を以て二八の羅刹と係り合う。

二九・三〇は、法華經の焼け残った点で二八の朽ち残った法華經の「妙」字と相結ばれ、亦、この故に、色身は滅びても不朽の舌もて法華經読誦を止めぬ三一を導き出し、三一は南菩薩の点で三二以降と連絡を保つ。

三二以降は、源信僧都・増賀上人・性空聖人及び高德の持經者の往生譚で、遠く卷十五と呼応するが、法華經に関する点多き故に、この位置に列なるものと思われる。

三二・三三は上品下生・上品上生の点で相隣り、三三・三六は奇行の僧で統一されるが、特に三三・三四は臨終に思ひ残す所なく振舞った点で相隣り、三四・三五は更に名僧が意外に簡単に招請に応じた点と円融院の天皇とで係り合う。

三六の夫妻の話は恐らく三七の信誓の両親の延命と無関係ではあるまじく、三七は不死の故に三八の仙人の話と隣り、三九・四〇の金峰山は三八の葛木山と地理的に相近い〔本巻の主なる典拠は、靈異記・三宝絵詞・法華驗記〕。

卷十三 一より四は持經仙の〔a〕、五より三〇は持經者を主とした靈驗譚〔b〕、三一より三八は破僧・女性もしくは一般人の靈驗譚、乃至は異類との交渉に纏わる靈驗譚〔c〕、三九より四一は法華の持者がその対抗者を敗る話〔d〕、四二・四四は愛執・罪業によって蛇道に生れた者が法華經を聴いて浄土に生れる話〔e〕。要するに、全巻悉く法華經に関する靈驗譚もしくは往生譚である。その主人公の伝記が大概本冊の記事より以上に多く判明しない無名僧である点、他巻と異なる特徴を持つ。以下、a・bについて細叙する。

a 人間の氣分を永く離れた仙人が目に見えぬ、もしくは、神通力を持つ護法・天神の奉仕を受ける点で統一される。

b 五は天神・冥道・護法に奉仕される点と女人の気分を全く離れたこととの二点で a と係わり、六は一俗人が持経者を供養する懇志で五と連絡を持ち、瞋恚の火で焼ける七宝塔で七・八を引き出す。七の多宝塔・八の堂塔楼閣は写経・経蔵の点で相並び、経の驗を記した九・一〇を導く。

一〇の路傍に誦経する獨體は、直接に一一の類話を派生し、一二の経を誦する巖の話の導入の役を演ずる。一二の静より動、入定より妄執への転帰は、一三の冥界からの蘇生譚を導き出す。

一三・一四は出羽・加賀の地理的關係、一四・一五は翁という共通事情で、一五・一六は老に臨んでの愛宕護入山で、一六・一七は誦経を聴く天童・大蛇が異類である点で、それぞれ統一されているものと覺しい。一八の盲僧開眼は一七の聰法に隨喜して目より沛然たる大雨を降らした大蛇の涙と相通じ、倒壊した果樹で三冬の食と暖とを得た点で纏て一九の倒壊寺院より救出された持経者の話を導き出す。一九・二〇は天災・人災よりの救出で、二〇・二一・二二は、馬・牛・虻・蜂・蛭で貫かれ、二二の吸血虫に対する献身は二三の羅刹の奉仕、二四の人知れぬ付き添いを後続せしめる。二五の見ざる国なく巡り行き、また、遠くをよく視る老持経者の話は、前後に、目に見えぬ者の庇護(二四)と両眼開眼せし盲女の話(二六)とを従え、猶、よく卜った持経者の話(二七)を予想せしめる。

二七・三一は臨終の異相を示すが、二七・二八は栗・柚と白蓮華と、即ち植物を以て統合されるものか。それとも、善相と早口とが相係わるものか。二九の死後誦経は直接三〇を抜き出し、三〇の世路に趨る持経者は三一の中頃無慚の生活を送った沙弥の話へと続く。臨終に、久方振りに漸く一部の誦経を終えた三一は、三二の毎日の一部誦経と、三三の毎日に一品誦経する話を直ちに連ね、三三・三四は三日三夜に亘る降雨・誦経と異類の願を成就せしめた点と奈良・紀伊という地理的關聯とで三重にかかわる。三四は誦経により異類を轉身せしめ、三五は自らを娑婆に戻らしめた点で共通し、三五・三六は閻魔王庁・浄土を見て蘇った点で統一される。女を主人公とする三六は「常に女に触れむ事を願う」男を主人公とする三七を導き出すものと考えられる。三七・三八・三九は破戒無慚・讒訴・傲慢で相隣る「右四十四話中、四圓圖の三話を除く諸話の典拠は、法華驗記」。

卷十四 二九までが法華經に關する靈驗譚「二一までは書写、二二―二五は誦誦に關する」。三〇以降が他經に關する奇異譚

という如く、大きく二群に分かれる。

a 冒頭の四話は、卷十三の末三話に引き続き、法華經の功德により蛇身を転じた僧俗の話であるが、一・二は金の隠し場所の天井裏・隠れ場所の衣櫃で、二・三は信濃よりの上京と熊野詣という羈旅でそれぞれ統一される。三・四は隔絶した身分の男と結ばれた女性という点で隣り、b 群を導く〔二・四は前世の善知識で、更に三は人獣通婚で五と結びつく〕。

b 五は男と契って死んだ狐がその供養により天に生れ、六は法華經を書写して貰った二猿が国守と生れた話で、その前後生と報恩との関係とは倒錯するが、畜生⇄人間という広い意味の往生関係では a 群と共通である。

c 七・八は立山の地獄に堕ちた娘・母が天に生れ、九は坑内に閉じこめられた美作の鉄掘りが生還した話で、七・八は女性という点と北陸を舞台とする点とで六と結びつく〔九・一〇は専ら地理的關係で前話と係るのであろう〕。

d 一四より一八は、前生に黒馬・蟋蟀・小犬・毒蛇・牛として法華經を聴き了せなかった為に、一三は衣魚として經文三行を食べた為に、一二は前生に二字焼けた經文を誦誦した為に、僧が今生にその部分だけ遂に憶えること能わざりし話。而して一〇の殺生は、これら諸話の序曲と見られると共に千部書写で八と繋がる。

e 一九より二五は、前生に大蛇・黒牛・耳垂れ犬・野牛・牛・白馬・蚯蚓であった僧の法華經受持で統一される。その中、二〇・二一・二三には猶前生の気分が棄て切れぬことで続くが、二三の口を喝めて物をいう姿は二七・二八の前触れとしての役目をも果す。

f 二六・二九は、法華經の不浄書写、もしくは法華經受持の男女を謗った現罰により或は即死し、或は生涯不具となった廉により相連り、また墮獄した話、二八を除く三話は好色もしくは女で連絡を保つ。

g 三〇は地獄における塗炭の苦と蘇生とで二九と相隣り、更に三一とは後者で結びつけられる。三三の開眼譚及び三四・三五・三六の加持祈禱は、やがて次群の呪力譚を予想せしめ、三七の前生譚は a・e 群と一脈の連絡を保つ。

h 四〇より四五は法力により或は法敵を呪い殺し、旱天に慈雨を齎し、或は尊勝陀羅尼・千手陀羅尼の力により鬼の難や大蛇の難より免れ、また猖獗を極めた流行病を見事終熄せしめる話であるが、四〇は恐らく高僧という廉で前群末に続き、四五は急病の由で四四に接続するものであろう〔前半は法華驗記、中程は靈異記に基く。末尾の七話は典拠未詳〕。

卷十五 すべて往生譚を収めるが、その主体をまとめれば次の如くである。

a 一～三〇

僧侶(一〇までは身分高き僧、二六以下は沙弥)(二六以降三五までは年次の排列をも加味)

b 三一～三五

臨終に出家した朝臣(三一・三二は臨終ではなく、三三は身分を叙する所が欠文)

c 三六～四一

主として、皇孫もしくは高僧の身内の女性(年次の排列も考慮)

d 四二～四五

朝臣・上席の地方官

e 四六・四七

殺生無慚の俗人

f 四八～五三

在俗の女性

g 五四

僧侶に仕えた下童

右のうち、四・五の接続は、供米の返済↓持斎を好まず、となるのであろう。七・八は無限の施、八・九は七十三・

七十四という高齢と死の三、四日前から断食した点とで連絡を持つ。一一・一二は法華經の説誦、一三の山中に赴いての往生は一四・一五の辺土にての往生を導入し、一七の靈驗所の歴訪、一八の大きな墓穴に自ら入って往生した話と直接間接に結びつく。一九は極楽世界飛翔の点で一八の墓穴に自ら投じた話と対蹠的であり、経・真言を両翼とした点で二〇・二一の二児を媒介とする往生譚と接続する。

二二・二三・二四は講を創始した僧で統一され、松の木の上で往生を予知する二五は風葬にあった二六の賀古教信と直接する。更に、狗・鳥に遺体を競い喰われた教信の話は二七から三〇に続く餌取法師の家に宿泊せる諸話を誘発する。三一より三四は臨終の異相で統合されるが、三一の尾長鳥と三三の孔雀は前群と若干の繋がりを持ち、三一・三二は更に微恙で死んだという共通点を持つ。

三四は異相で前群末と密接な関聯を持ち、三四・三五は同姓高階で相隣る。

四二は母親の登場によって前話群末と一脈の聯関を保ち、五一・五二・五三は蓮華で統合される(往生極楽記に拠るものが三〇話、法華驗記に基づくものが一二話、他は典拠未詳)。

卷十六 すべて観音の靈驗譚であり、或は毎月の十八日毎に持斎した、また法華經の觀音品(普門品)を誦誦した人達が、

黒部通善氏は、年次の排列を部分的に加味してある点を強調し、本巻が列伝体往生史であるという考えを最近發表した。
↓国語国文学七「今昔物語集卷十五考」作者の説話配列方法とその意図について(名古屋大学一九六〇年十二月)。

また観音に親しく詣でた人達が危難を免れ、開運を得る話で一貫する。

a 一・二は高麗・百済に渡っていた日本人が彼の国の敗軍・滅亡に出会い、辛くも逃れて帰国する点で共通する。

b 三・五は横死、四は餓死、六は窮死すべかりし人達が、持仏たる観音像・観音経の力でそれぞれ危き所を助かるという筋で統合される。a 群との連絡も亦観音像に在ることは分明である。なお、四の狼・猪、五の馬、六の鷹・大蛇にはそれなりの連結が十分に感得せられる外、五・六には謀殺未遂という共通点も算えられる。

c 七・九は孤独の貧女が偶然の機会に然るべき男に出され幸運の生涯を送る点で大幅に一致するが、形見に与えた垢衣・頭髮によつて召使・嫗が観音の化身であることを知る語り口は非常によく似ており、就中、七・八は類話といつても差支えない程酷似する。一〇は右六話と稍方向を異にするが、貧女が主人公である点で統合されるものであろう。前群末とのかかわりは、化蛇・化女の点に求められる。

d 一・一三三は観音像自体の靈驗譚「九の指の先、一〇の足が一の首を誘発せしめたと見るべきか」。

e 一四・二二は、若い男女、もしくは夫婦関係を持つ男女の話が連続する。一四・一五は結末が「楽しい」生活を送る点で、一五・一六は動物の報恩で、一七は未然に終った一五・一六の人獣の通婚が行なわれた廉で相連り、一八・一九は国守・国司、二〇・二一は大宰大貳・国司の息という間柄と盜賊とで相隣り、二三・二四・二五は、或は偶然に、或は奸計により、暫時、海上・海辺に孤独・絶望の時間を送る点で共通する。二六・二七は、絶体絶命の窮境に陥った点で二四・二五と結ばれるものか〔前群末とは、洗われる・流されるで隣る〕。

g 二八・二九は貧しい男が長谷観音に、三〇・三一に貧しい女が清水観音に祈つて富を得た話で統一されるが、前の群との結びつきは二七の錢三十貫が金錢を導入する点にある。

h 三二・三三・三四は主人公が女である点で纔かに統一されると共に、前群末とも連絡を持つ。

i 三五・三六は極楽往生と蘇生譚とで相隣るが、その推移は池↓三途河という水辺上の結びつきと蓮華咲く池↓釈蓮乗という言葉づけにも似た関聯を持つと見られるが、前群末との関係は、身を落す↓池に落ちる、であらうか。

j 三七・三八・三九(尾欠)は、恐らく、現罰で連絡するのであろう〔靈異記・驗記に拠るものがそれぞれ一一・九。扶桑略

記によるもの一、残る一八は未詳」。

卷十七 一〇三二の諸話は地藏菩薩の靈驗譚、三三は虚空蔵、三四・三五は弥勒、三六〇三八は文殊、三九〇四一は普賢菩薩、四二〇四四は毘沙門天、四五〇四七は吉祥天女、四八は妙見菩薩、四九は執金剛神、五〇は仁王に関する靈驗譚であり、すべて菩薩・聖衆の靈驗譚である。

右の中、大部分を占める地藏靈驗譚の内部については、更に次の如く考えるを便とする。

a 武士もしくは武士に使われる郎等を主人公とする。一・二は生身的地蔵菩薩に値遇する点で、三・四は捨つべかりし生命が地藏菩薩の化身によって助けられる点で、五・六は地藏菩薩自身が或は夢に告げ、或は化身となって触れ知らせて自らの存在を全うする点で統合せられる。

b 七〇は施心広き出家、c 一一〇一三は俗人を主人公とし、d 一四〇一八は主人公が勝地を求めつつ修行にいそしむ点で大きな統一が見られるが、更に一七・一八は蘇生譚をも加味し、e 一九〇二九の冥土往還譚に接続する。

右のうち、一四〇二〇は僧侶、二一以下は俗人、二五〇二九は女を主人公とするが、殊に二五・二六は夫婦関係を以て相隣る。なお、二六・二七は冥途で会った女の実家を主人公が訪問する点で統合される。

f 三〇は死期を予告して往生した僧、三一は孤地獄に墮した亡夫を救った尼、三二は夢に往生の要諦を教えられた国守の話、三三は地藏の方便で学生となった迷執深き若僧の話で、相互に比較的聯絡は薄い。

右のうち、三一・三三には女が介在し、三一・三二に和歌を見ることは、二九と同様である〔三三話までは、今は伝わらない実叙撰の地藏菩薩靈驗記に拠ったものと覚しい。三四話以降では、靈異記・驗記に基くものそれぞれ八・四、他は未詳〕。

説話における類型性と破調

凡そ、類聚説話集としての骨格は海彼の三宝感應要略録に仰ぎながら、また殆ど大部分の素材は粉本たる日本漢文の先行文献に求めながらも、編者は超現実的な靈驗譚に交えるに民間に生に伝えられる口碑伝承を以てし、ともすれば生々しい生命の失われがちな類想・類表現にリアルな描写・現実社会の諷刺を適宜織り交ぜることを忘れたかった。例え

ば、同じ鬼の形容にしても、天竺部・震旦部とは異なり、

義叙迫ヨリ見レバ様々ノ異類ノ形ナル鬼神共来ル。或ハ馬ノ頭或ハ牛ノ頭或ハ鳥ノ首或ハ鹿ノ形、如此クノ多ノ鬼神出来テ各香花ヲ供養シ菓子飲食等ヲ捧テ前ノ庭ニ高キ棚ヲ構テ其ノ上ニ皆膳ヘ置テ礼拝シテ掌ヲ合セテ次第第二居ヌ 208 1 4 其ノ時ニ聖人、貴シト思テ目ヲ開テ見レバ長ケ一文余許ナル鬼也、色ハ黒クシテ漆ヲ塗タルガ如シ、頭ノ髪ハ赤クシテ上様ニ昇レリ、裸ニシテ赤キ俗衣ヲ擲タリ 338 8 10

此ノ火燃シタル者共橋ノ上ヲ東様ニ過ケルヲ此ノ侍和ヲ見上ケレバ早ウ人ニハ非ズシテ怖ゲナル鬼共ノ行ク也ケリ。或ハ目一ツ有ル鬼モ有リ或ハ角生タルモ有リ或ハ手数タ有モ有リ或ハ足一ツシテ踊ルモ有リ 488 10 12

女人ノ宣ヒシ如ク「修陀々々」ト呼バ高ク怖シ氣ナル音ヲ以テ答ヘテ出来ル者有リ。見レバ額ニ角ノ一ツ生テ目一ツ有ル者ノ赤キ俗衣ヲシタル鬼也 573 14 16

などあるのを見れば、我々が現在承知している鬼の映像と全く同じであることが分かり、彼の西三条常行の恐怖感を描写した、

「尊勝真言ノ御マス也ケリ」ト云フニ其ノ音ヲ聞テ多ク燃タル火ヲ一度ニ打消ツ、東西ニ走り散ル音シテ失ヌ。中々其ノ後頭ノ毛太リテ物不思エズ 336 8 10

は、一昼夜漂流の末海辺に打ち上げられた郎等、源二を描写したところの

中々ニ上テ後死入タルヲロニ水ヲ入テ火ニ炮ナドシテ生出タルニ 475 2

と、もとより類表現ではあるが、かかる情景・場面に遭遇した者ならではの描き得ぬ迫真性を持つ。また、種種食物を与えた後に「但シ器ヲバ後ニ返シ給ヘ」(440 12 13 14) 類表現については 193 12 という、観音の化した隣の富女の会話や、「世ニ経ル人ハ様々ノ道ニテ世ヲ渡ル事也」(450 14) には著しい現実性が感じられる。

しかしながら、例えば巻十四圖第二段における大蛇の形容、

蛇共聖人ノ香ヲ聞ギテ頭ヲ四五尺許皆持上ゲ合タルヲ見レバ上ハ紺青緑青ヲ塗タルガ如シ、頸ノ下ニハ紅ノ打擲練ヲ押タルガ如シ。目ハ鏡ノ様ニ鑢メキ舌ハ焰ノ様ニ露メキ合タリ 337 14 16

は、この限りにおいて新鮮であるが、毒蛇が「頸ヲ持上テ舌舐ヅリヲシテ」(279 3)、「目ハ鏡ノ如クニシテ舌舐ヲシテ」(433 1)等と部分的に表現を等しうし(舌ナメヅリは、夙に第一冊二一九頁六行に見える)、更に巻二十〇に玆と殆ど同じ形容が見

えることを思うと、本集のリアルな描写にも自ら限界のあることが予想される。また、彼の季節感にしても、信州の十一月の山寺を描写した²³³のあたりは、十二月の印南野を描写した⁴⁶³と共に、それなりに詳しい冬の景が述べられているが、一方に「三月許ノ事ナレバ極テ寒シ、被振テ：」（⁵⁵⁴1）、「三月許ノ事ナレバ極テ寒シ、節々フ：」（⁴⁶⁹9-10）が震旦部の「桑田ト云ハ耕畢テ未ダ不下ザルヲ云也、此レヲ思ニ三月許ノ事也」（²¹⁹13）と遙かに呼応することを考えると、抽象的な表現「十月ニ行フ事ナレバ程モ極テ哀レ也」（²⁹⁶15）に較べて、どれだけ具体性を持つかは疑わしいことになる。この点では却って、「柏メ数タ着タル」（⁵⁴⁹12）ことによって晩秋を、「調布ノ帷濯ギケム世モ不知ズ朽タルヲ二ツ許着タル」（³⁶⁹12）によって寒中なることを知らしめる象徴的表現の方が我我に身近な感じを与えるに役立つであらう。

右のような意味で、本冊所収各話の発想・素材・表現は、天竺部・震旦部の類話とも本朝部の各話とも係わること大きく、また陰に陽に触れ合う所が大きい。類型性の比較的稀薄に感ぜられるものは、その要素・契機が散発的・偶発的・潜在的なるが故に外ならぬ。所謂、類話というのは、その要素・契機が集中的・公式的・顕在的なるが故に類表現が鼻につくものであるとするならば、読みを深めるに従って次第に前者を後者の位置まで故らに引き下げようとする我等の方法は、確かに或る意味において最も不幸な態度といわねばならぬが、類型表現が説話集において何を担っているか、ということに思いを致すとき、寧ろそれは最も基本的な享受の仕方といわねばならぬ。

即ち、つとめて怪奇靈異を語る、というよりは、寧ろ、専ら怪奇靈異そのものを通じて、仏法の尊嚴を敷衍し、心を起して善事に従うべきことを民衆に透徹せしめようとする本集においては、怪奇靈異の説明・証明、乃至予告・予知の手段として、夢が必須の方法として要請された。例えば、夢が説話の重要な契機になっている話を求めるならば、卷十一に⁹38、卷十二に⁶40、卷十三に¹⁶44、卷十四に¹⁹45、卷十五に¹⁷54、卷十六に⁶40、卷十七に¹²50見られ、恰も、今昔夢物語ともいふべき感を与えるが、これはやはり、神人交通を容易ならしめる端的な便法として考案されたものに外ならず、彼の化人であることの説明、乃至証明として取られた「誰ト云事ヲ不知ズ」、「搔消ツ様ニ失ニケリ」、「行キ方ヲ不知ズ」、「其後聞ユルコト無シ」等や、凡慮を絶した叡智・靈驗、常識を超えた異類との交通を予告する伏線として往々試みられる「弟子ノ僧是ヲ聞テ何事ヲ宣フトモ不悟シテ心不得シテ止ニケリ」（⁸⁶10）、「女人此ヲ見テ大キニ恐テ此レ

何ニシテ置タリト云フ事ヲ不知ズシテ」(150 12)、「男此ヲ實トモ不信ズシテ家ニ返ヌ」(284 6)等と同じように、恐らく、説話進行上もしくは構成上の一つの約束であると理解される。

即ち、このように考えてくると、最も陳腐なもの、最も類型的なものが本集では最も重要な約束・役割を担っているという見方も成立しないではない。かの千篇一律な巻十五の往生譚における類型表現の如きも、このような観点からすれば、なかなか捨て難き味と存在理由とを持つ。つまらぬ物を強いて面白がることは、窮極において我田引水の嫌いを免れまじく思われるが、普通つまらぬと目される物の中に汲めども尽きぬ味と意義とを見出すのは哲人の眼・科学的分析を経た観察眼でもあれば、また、同時に物事に驚きを見出す幼児・素人・初心者の目でもある。研究者は須く前者の眼で本冊を見直すべきであり、本集の編者は後者の如き読者・聴衆を対象と予想して「哀レニ悲シク貴キ」話の数を次次に展開したものと考えられる。

勿論、同じく超現実的な類話であっても、すべてが万人の共感を買得るものとは限らない。概していえば、長目で筋が起伏に富む話もしくは寓話的要素の強いものにはそれが多いようである。また、たとえ部分的にはあっても、各民族共通に語り伝えられる話やその手法を汲むものは、理解がし易い上に興趣も亦一段と深く感ぜられる。例えば、夜明けと共に樹精(101 2)・鬼神(208 5)が退散するのは西欧の童話における妖精・小人の話と同様であり、鬼や異類の出現に際して、

夜半許ニ不例ズ物怖シキ心地シテ堂ノ後ノ方ヨリ風打吹キ気色替テ物来ル様ニ思エケレバ

281 2 3

初夜ノ程ニ俄ニ微風吹テ常ノ気色ニ非ズ

208 1

洞ノ内生臭キ事無限シ。然レバ此ヲ恐ル、間夜半許ニ微風吹テ不例ヌ気色也、生臭キ香弥ヨ増サル

231 11 12

夜半ニ成ヌラムト思フ程ニ聞ケバ壁ヲ穿テ入ル者有リ、其ノ香極テ臭シ、其ノ息牛ノ鼻息ヲ吹キ懸ルニ似タリ

565 3 4

と述べるあたりは、東西の昔話に共通するところである。また、

「今夜怪キカナ。例ニモ非ズ人間ノ氣有ル輩有リ。誰人ノ来レルゾ」

208 4

鬼共過グト云ナル様「此ニ氣ハヒコソスレ。彼レ榻ノ候ハム」ト云テ者一人走り係テ来ナリ

336 2

